

古来の漆家紋

湊 學季著



奥州安倍氏の実態

復元した系図から見える真実

安倍氏に謎はなかった

はじめに

【先ず古代に史実を求めて】

奥州安倍一族の歴史は不可解でよく分からず、俘囚の長という伝承があることから、それがまるで蝦夷の末裔であるかのように、捉えられていることを目にすることがある。しかし一族にはその祖を、「第六天魔王孫大梵天王安日長随彦」とする伝承がある。この第六天魔王孫大梵天王なる先祖について考えてみたい。

『謎の新撰姓氏録』（高橋良典著 一九九〇 徳間書店）によれば、解説を省きその記事から要約すると。それはインドのデカン高原（古事記でいう高天原）のクル族の第六代の王であり、インド名は（ラーバナ＝バーラタ＝ドリョウダナ）などと呼ばれ、日本書紀では（面足）という神になり、その子孫が倭国に渡来して、子孫が安日長随彦（アビナガスネヒコ）につながる。ということなのである。このように言語を文字の入れ替えなどの手法でいろいろ操作して、漢字に当てるまでの過程を、アナグラムというようだ。また『謎の新撰姓氏録』にはこのように、インドから倭国に渡来してきた氏族は他にも多くあるとしている。また市川湊文書には、安日一族は長随彦まで七〇〇年間、大和の地に君臨してたともある。古代においてこの倭国に移り住んだ氏族が、どのくらいあるのかは分からないが、インドからの渡来を今に伝える文書はこの湊文書しかない。そして湊文書が伝える太古の伝承を、ものの見事に物語る史書も他に知らない。このように太古における伝承が、互いに補完しあう事実は偶然ではなく、史実であるからではないのか。私にはいわゆる学術書にはみられない共感をおぼえたのである。

また記紀年代を実年代に変換してみれば、『改竄された記紀と古代日本』（湊學季著 星雲社）、ホームページ『記紀によって記紀を正す』（<http://www.geocities.jp/rokutenmajp/>）参照）歴史的ストーリーは、彦火瓊々杵尊に始まる東進、出雲の国譲りなどの倭国大乱により、銅鐸を抛よりどころとした信仰集団も、神武に破れた安日長随彦の敗北とともに終焉し、邪馬台国の卑弥呼が、今までの銅鐸信仰集団の代表として、女王として推挙されるが、神武側に恭順を示すために、銅鐸や銅剣を埋設する。そして新たに鏡を抛とするが、太陽を崇めることには変わりはないようだ。年代を捉えてグラフ化してみれば、今まで年代的に断片的にしか考えられなかった、そんなストーリーも浮かんでくる。

従って神武政権と卑弥呼政権とは併立である。そしてその時の国の代表は卑弥呼であり、神武政権ではない。神武政権が代を重ね国王になるのは崇神大王からなのだ。記紀に初国知らずとして二度あるのはそのためである。この神武から崇神までの初期大和政権は、全てが血脈というわけではなく、豪族の中から選ばれたことは、記紀の不自然な略年から知れる。

そこには何とか血脈に見せようとして、苦労しているデータ操作に歴然として現れている。

ところで安倍一族の伝承によれば、長随彦の子孫は孝元王につながり、子孫は大彦から延々として続いている氏族である、ということが出来るのである。それぞれの氏族が倭国に渡来してきた年代は、永きに亘って後先の違いがあろう。そして古くから移住していた先住氏族は、文明の

進化の差によって、後来してきた氏族より遅れをとることになる。

そしてやがて氏族同士が国内で同化し、後来の氏族が優位に立った時点で、国史の編纂を始めた場合、その国の有力な氏族を中心にして史実が歪曲され、年代や系譜も都合良く改竄される。ただしその改竄も史実が復元可能なように、多くの手間暇かけて頭脳的に編纂されているのが記紀であろう。このように復元可能な操作は、一種のアナグラムかもしれない。また後述するが秋田家系図の場合は全く復元不可能である。そのために安倍一族の歴史研究は、未だに混迷を続けているといっても過言ではなからう。

いずれの場合においても、ある権威をもった史書が発刊されると、その後の史書はすべてねじ曲がったものに収斂してしまう、ということなのである。結局そのような影響を受けた史書をいくら読みあさっても、そのままでは史実を正しく蘇らせることはできない。当然にして生じる矛盾や疑問は、言葉巧みなこじつけですまされて、本質的な解明には至らないということになる。改竄書と偽書との違いは何であろうか。少なくとも復元の可能性を秘めたものは偽書ではないであろう。何れもそのままでは真実が分からない。これは私が歴史書を眺めて感じ取った感想である。

そのようなことから私は、どうしても疑問をぬぐい去るとのできない問題は、その本質を見いだし、それを解明する糸口を見いだすしかないと感じ、専門家に尋ねず（現状から離脱できるはずがない）、また史料は私が今まで所持していなかった、文庫本の古事記と日本書紀は購入した。そして記紀年代データを拾って、歴代と年代のグラフを作ることから始めたのである。そしてグラフを見たとき、これが明らかに人為的操作をしたものであり、復元できるのではないかと感じたと同時に、このような年代を生で捉えた研究が、皆無であることに驚きを隠せなかった。百歳を超す古代人に何も異常を感じなかったのであろうか。それとも神の世界とでも思っていたからであろうか。歴史学とはまさに文学の世界であることに、嫌気を感じたのである。そして収斂することのないいろいろな説が生み出されるが、何か組織という狭いしがらみの世界から、突破できないでいるようにも思えたのである。

であるなら自分だけでもよい、自分に納得いくものを考えてみようと試行錯誤して、古事記と日本書紀の両書から、それぞれの変換式を作ることに辿り着いたのである。それから十数年間それが正しいものかを、考古学的情報やインターネットなどの検索などにより、個人として十分検討して自信が付くまで温存し、それによって見えてくる系譜のあるべき姿などを、前述のように出版したのである。

そこには歴史的人物が実年代で張り付いており、眺めるだけでも史実が浮かび上がってくる。例えば中国の史書にある倭の五王とは、年代的に崇神大王の王子である、豊城入彦命の孫から続いた、彦狭島王の子孫一族ではないのか、また埼玉古墳に眠っていたヲワケノオミの鉄剣銘にある四七一年とも重なり、これが古事記では倭建命、日本書紀では日本武尊として物語られていると見えてくる。このように文献の読みあさりでは、今まで考えも付かなかったような事柄が、系譜線図から容易に俯瞰できるのである。

そしてさらに安日長随彦の子孫安倍氏が、古代の大和政権で活躍していた史実も復元できた。継体大王は別名日下大王であり、さきたま稲荷山古墳の鉄剣銘にあるヲワケノオミの五世孫で

あり、安倍一族の出自であることも分かったのである。なお参考までに述べると、安倍一族の子孫である安倍姓湊家の文書には、長随彦を安日長随彦とし、記紀と同じく安日彦という兄なる人物は存在しない。太古、安日（アビ）とは一族を表す姓のようなものであり、号は日下（ヒノモト）とある。

そして大和から奥州までの変遷は私の推測ではあるが、安倍氏の一部はいわゆる壬申の乱を境にして、中央の安倍氏とは別に、藤原氏が台頭してくるにしたがい、東国への転進を思わせる様が窺える。安倍氏一族の足跡を、系譜として捉えることは困難であるが、一族に関連する名が（阿倍を含む）東国にも多く見られるようになる。一族のベクトルは確実に北へ向かっているのである。私にはその点と点とを結びつけるものに、二つの浄法寺という名称で繋がるように思えてならない。

それは那須郡にある浄法寺廃寺跡と、岩手県二戸市浄法寺町にある天台寺のことである。私は二戸市の浄法寺町の地名から、天台寺の前には、浄法寺があったのではないかと思ったが、那須郡の浄法寺廃寺跡はその遺跡調査から、七世紀後半の建立と考えられ、二戸市の天台寺周辺の礎石建物跡は十世紀と推定されている。ところがその天台寺の縁起では、奈良時代聖武天皇の命を受けて、行基が七二八年に開山したと伝えられていることなのである。この縁起の年代では天台寺開山とは合わず、これは天台寺に関する伝承ではない。またその時代の東北に仏教施設があったとは考えられない。どうもこれにはそれなりの訳がありそうである。

そこで調べてみると那須の浄法寺とは、那須官衙に併設された寺のようだ。これは行基が七二八年に開山したとしてもおかしくはない。どうやら那須の浄法寺の開山情報が二戸市の天台寺に伝わったようなのである。ではその人物または集団とはということになる。それはもう安倍氏以外考えられない。安倍氏は十世紀には岩手県の二戸市に、那須の浄法寺の伝承を持ち込んだと考えられるのである。天台寺の前身が浄法寺だったかどうかは分からないが。

【中世にも史実を求めて】

ところで私は安倍貞任以降の安倍一族の実態にも、大いに疑問を抱いていた。それは湊文書に残る系譜史料と、秋田家系図との違いである。しかし断片的な史料はあっても、全体的に史料が少なく、史実を探求することは不可能と諦めていたのである。これは記紀年代の改竄とは異なり、データそのものがないという最悪の状況である。問題の質が違う大きな事情である。

ところがある時『東日流外三郡誌 第六巻 諸項編』と遭遇した。そこには秋田の領主安倍貞季（定季）が、明応四年（一四九五）に補陀寺に献上したという、安倍一族の系図が載っていた。それを見た私は、これは嘘偽りでは作れない貴重な史料であると直感した。『秋田家系図』は秋田実季が万治元年（一六五八）に完成したとされているが、実はその一六三年前には、安倍一族の全貌を把握していた人物が存在していたという事実である。愛季より前に文書が殆ど見られない現状で、これは大きな意味を与えてくれる。秋田の領主を氏神である、男鹿本山の赤神神社の棟札に捉えていた、湊文書がそれを確たるものにしたが、この系図が湊城にではなく、補陀寺にあったということだ。そこで考えられることはいわゆる湊合戦のことだ。この始まりは愛季

亡き後、実季が湊城にいることに湊側が異議を發したことで、檜山方（実季方）が画策したことから始まるのである。

その真相は当時豊島城にいた湊高季・政季兄弟を、湊城に饗宴せんとする名目で呼び出し、そこで討ち取ろうとしたことが発覚し、湊方が先手を打って湊城にいた檜山勢を急襲したとき、檜山方は湊城に火を付け撤退した。湊方は火を消して全焼ではなかったようだが、そのときに湊家の始祖である鹿季の強力な弓矢が焼失したと、実季は覚え書きに書いている。焼失した物は弓矢だけとは考え難く、当然文書などの歴史的文化財も失ったのではないかと考えられる。貞季の作成した系図は不幸中の幸いであつたといえる。

また檜山方の実季は覚え書きに、自分は系図のようなものは持ち合わせていないと述べている。すると全ての城主が系図を持っていたのではない、ということになる。系図は領主しかもてなかったのではないか、という一族に特有な習わしも課題として残るのであるが、いずれにしても鹿季歴代の遺した歴史史料が、なにもないということは残念至極である。実季にはその存在が分からなかったようである。私はこの貴重な貞季系図より安倍一族の実態を考察してみたい。

【補陀寺にあった系図】

この補陀寺にあった系図をこれから貞季系図と言うことにするが、この系図の特異な点は、安倍一族とは貞任以降、三本の系譜に広がっているということである。それは高星丸系の大里藤崎城系譜・氏季系の十三湊入潤城系譜・和任系の十三湊入潤城安藤系譜の三本である。このように一族の人物関係の多い系図は、今までの陳腐な史的価値のまるでないものと違い、今まで見たことのないものである。この人物関係の情報量の多さは、人物関係が少ないものより信憑性が高いといえる。それは人為的に情報を操作して減らすことはできても、逆に増やすことは、整合性に無理と矛盾ができて、不可能と考えられるからだ。

ところがこの『東日流外三群誌』は、裁判で偽書との烙印を押されたのである。確かに安倍一族の歴史物語などは、作者和田喜八郎の創作もあるだろう。多くの貞季名を使い分けているなど、貞季系図を参考して断片的な史料を物語りに綴ったとも考えられる。史書ではない小説のたぐいと考ればよいのでは。

しかし系図そのものは別である。系図は独自に吟味できる。味噌も糞も一緒にしないでいただきたい。どだい歴史を裁判で決するなど、狙いは学問の外にあるやに勘ぐられる。

そのような訳で私はこの系図には情報量の多さに注目した。そこで明応四年に補陀寺に献上した安倍貞季系図から、どのような史実が得られるかという期待に心躍った。そこでその系図の検討作業に入った。そして十数年じっくりかけて、私見の安倍一族の系図を復元させた。その完成に至るまでの経過を大まかに説明したい。

まず原典である貞季系図とは、巻末にある（図1）のようなものである。これを見れば誰でも藤崎系（後の上国）の系譜が他の二本の系譜よりも、歴代の代数が多くて奇異に感じられると思う。だから信頼できないとか、それが『東日流外三郡誌』に載っていたからなどの、ひらめきのない単純な思考で切り捨てる訳にはいかない。従来の断片的な史料だけで批判するには限度を超えている。連続した系譜には何らかの史実が情報として、潜んでいるかもしれないからだ。先

ずは可能な限り情報を抽出して大事に扱い、その全貌を明らかにすることが絶対に必要と考えた。系図が偽書だ何だかんだはその後でよいだろう。

私はこの系図を一族の貴重な歴史資料として、史実を抽出する立場に立つだけである。そして私はこの貞季系図は藤崎城の歴代系図であり、血脈系図ではないと考えた。そうであるならむしろ嫡庶に拘らない、一族特有の精神が込められた、ある面史実に忠実な書き方ともいえる。しかしこれでは分かりにくい。そこで何とか一般的である、血脈的な系譜に復元できないかと考え、合理的なる前提条件を定めて奮闘して、(図2)のような復元作業を図にまとめ、それを基に(図3)のような血脈による復元系図を作成した。このような歴代の血脈が分からないと、一族間の人物の動きが掴めないからである。そしてさらに私は系図には系譜歴代を年代軸に貼り付け、事跡その他で齟齬を生じない、より確かさが追求できるように、年代とその時代の関係が把握しやすい(図4)のような、系譜をグラフ化したようなものも作成した。このような作業を通して気がついたことだが、十三氏といわれる十三湊の領主は則任であるが(後の下国)、この則任を貞任の兄弟とすることには無理があるとして、則任を一代上の頼良と同世代においた。(現に古来からの伝承にそのような説がある)。なお氏季系では氏季が三代続くが、これについては分からない。実名の記録が喪失したためであろうか。

また人物の生没年など年代史料が乏しくて分からないものは、相互の何らかの関係を基に配置した。そのような貞季系図を復元したものを通し、私が安倍一族の史観として感じたことを述べていきたい。この系図の真偽および使いものになるかどうかは、人物の事跡との照合で決まるであろう。

安倍氏の習わし

【通字に見る習わし】

安倍氏の三系統の系譜を見て分かることは、初期は別として実名に「季」の一字がついていることである。それも出自において氏季・和任兄弟の家の場合、兄の家の子孫は「季」の文字を下に、弟の家の子孫は「季」文字を上につける。という通字の上下のちがいがあることである。この習わしは湊文書では近世まで続いていたことを確認できる。また通字の習わしが確立する前の三系統の初期では、高星丸とは実名が「安任」であることが分かるのである。何故なら不思議なことに高星丸は幼名であり、成人してからの実名が事績として表れたものがない。

ところが私の作成した復元系図から、これは年代的に男鹿本山の縁起にある(巻末にある「小鹿本山縁起之内抜書」参照)、応徳元年(一〇八四)安倍貞任(ママ)榎蔵田三町寄付と、永長元年(一〇九六)安倍安任副田三町寄付なる人物に符合する。ただし一〇八四年に貞任は生存していないことから、この二度の寄付した人物は安倍安任とすることができる。男鹿本山は古来より奥州の領主の庇護のもとにあったようだ。

私はこれがこの系統を「安東」とする呼称の起源ではないかと考えている。また同じように藤原氏と縁の深い和任系には、苗字をそのままずばり「安藤」としたものも見える。こちらの系統は名の「季」を上にする系統であり、何れもその出自を明確に表しているのである。このようなことから従来の習わしを考えない人物関係を、きちんと捉えることが必要になろう。実季の作成

した秋田家系図では、貞任からの系譜は一本であるとし、藤原氏との関係を通字「季」の代わりに、「秀」に置き換え、その関係を示唆した作為を感じる。秋田実季はどうしても安倍貞任の、直系でなければならなかったようである。秋田家系図は極論すれば史書とは考えられないのである。

【改名に見る習わし】

奥州安倍一族は貞任を始祖としている関係で、多くの子孫が初名を貞季とするものが多い。そのほかにも人気のある文字がいくつかあるようであるが、そのようなことから不都合があったのかどうかは分からないが、後になって改名するものも多い。貞季系図は初名で統一してあるようだ。そしてその改名の習わしとは、文字を変えても読みに通じるものを遺すということだ。

例えば頼義・頼時で言えば義と時では、共通の読みには（ヨシ）がある。頻と盛では（シゲ）・宗と政では（ノリ・カズ）・兼と師では（カズ）・貞と忠では（タダ・ツラ）・只と法では（ノリ）という具合である。したがって『米良文書』にある下国の歴代、宗季—師季—法季—盛季—泰季は、（図3）の復元系図の初名で辿って見れば、政季—兼季—貞季—盛季—康季となるのである。ただし貞季は応安五年（一三七二）の男鹿本山棟札では、領主忠季とあるので、さらに法季と改名したことになる。康季が泰季とあるのは改名か誤記かは分からない。また盛季には長子に守季がいるが、この場合は当然読みをシゲスエ・モリスエと呼んだのであろう。このことについては実季は覚え書きに、「モリスエ二代アリ」と書き残している。当初私はこれが何を意味するのかが分からなかったが、貞季系図を見てそれを知った。

しかるに出来あがった秋田家系図はそれとは違う。また湊家とされる鹿季子孫の成季のことである。この湊系譜に関しては後の「湊家の創立」でも考察したいが、鹿季は盛季の三男である。守季・康季・鹿季は兄弟なのだ。湊文書では一貫して康季・鹿季は兄弟である。また成季という人物についてであるが、読みで探せば愛季しかない。しかし愛季は秋田に住む能季の子であり、能季は盛季の弟という関係になる。要するに鹿季子孫に鹿季同世代の成季は存在し得ないのである。この混乱の元凶は信頼できない秋田家系図にある。秋田家系図は秋田氏だけにあればよいのであって、学界の研究対象にはなり得ない。

以上奥州安倍氏の習わしを述べて見たが、これは当然復元系図の全貌を考察した中で見いだされた、本質的な要素である。このようなものを先に見いだしておけば、人物の動きが正しく再現できるであろう。では次に私の作成した系図から、安倍一族をイメージした安倍史観を述べてみたい。

私の奥州安倍史観

奥州安倍氏は頼良の子に八人の男子があり、そこからの子孫で一族を成したように書かれているが、頼良にも兄弟がいなかった訳もないし、その前の世代でも同様であろう。切りのないはなしである。これはおそらく前九年の役などの大きな戦いで、一族が結託したまとまりを表したのではないだろうか。したがってそれを厳密に考える必要はないと思われる。そして私は則任を貞任の兄弟ではなく、頼良世代の人物として考えた。また現にそれを裏付ける、安倍頼良の弟で

あるという説も目にする。そして安倍則任は十三湊の初代領主であり、十三氏とも言われたようである。年代的には十一世紀頃であり、規模は分からないが既に十三湊系の源流があったことが、十三湊発掘結果からも窺えるようだ。

奥州の安倍一族は決して貞任からの一本の系だけではなく、藤原氏の血を交えた、大きく三本の系に広がりをもっていることになる。実季の作成した秋田家系図はそれを分からぬこととごまかし、通字の「季」を「秀」に変えて、藤原氏との関係を示唆しているのである。しかし秋田家系図の出来た百六十三年前には既に、湊の領主安倍貞季が一族の見事な系図を補陀寺に納めていたのである。この実季の作成した系図に翻弄された研究者も多く、未だに信じられないようである。であるからこそ私のように、歴史に何の柵もない者が考えることなのかもしれない。

さて安倍氏の一部が藤崎から十三湊に移動した時期だが、私の復元系図（図3）では、十三湊の藤原道長の後の貞季ではないかと思われる。そのころから安倍一族の居住地に、十三湊住という人物が見られるようになる。ただし貞季の弟と思われる善季が新城住となっていることだ。年代では一二三〇年頃であろう。初期の頃は貞季は藤崎を完全には離れず、弟の善季を十三湊福島城に住ませたようだ。十三湊を下国とした呼称はこの頃からであろうか。

ところで藤崎から十三湊（下国）に進出するに当たって、藤原直秀を十三湊から追い払ったという萩の台の戦いが、寛喜元年（二二九）にあったという説を目にするが、貞季系図からは藤原氏が完全に十三湊を撤退したようには思えない。それもまた秀直ではなく、孫の道長の時代に当たる。萩の台の合戦は貞季系図からは窺えない。なお秋田家の菩提寺龍穩院にあった『十三湊新城記』のところの政秀は、貞も政も共通の読みがタダなので、貞季を示唆しているのだろう。

それにしても多くの史書がふれていない、貞季系図にある元軍戦による討ち死にであるが、この元軍が何を指すのかは分からないが、安倍一族がこれだけ多くの犠牲を払って、夷荻から日本を守ったとしたら、あまりにも顕彰がお粗末ではなかろうか。それが嫡庶の意識を超えてその壊滅的な打撃を克服したのが、藤崎城主の入れ替わりであろう。ただしどのような方法で行われたかは分からない。兄弟までが揃っていくのではなく、単身の移動ではないだろうか。

ところで南北朝時代に入ると、安倍一族の活動も賑やかになるが、貞季系図ではこのあたりの人物の出入りは、嫡庶を超えて実に複雑なものであったことが窺える。季久（藤崎）・季長（十三湊）による内乱を始め、嗣子がなく養子となったりの人物の動きである。また事績にはあるが、貞季系図には見えない人物が入ることだ。それは嘉元鐘にある安倍季盛のことである。この人物は「季」の字を前にしているから、安藤系の人物である。そしてその年代は一三〇六年頃の人物となり、貞季系図の空欄になった年代の人物に、合致する（図2）。そして季久の親に当たる。しかしここで問題が出てくるのである。それは季久・季長が従兄弟か従父従兄弟かの問題である。私は『諏訪明神絵詞』がただの従兄弟でなく、あえて従父従兄弟としていることから、季久・季長のそれぞれの祖父が兄弟ではないかとして扱っている。従来の研究はそれを論じるまでの域にない。

それはともかく、この季盛は鎌倉との関係が深かったようである。鎌倉にでも住んでいて、そして嘉元鐘とともに藤崎に入ったのもあろうか。本来は十三湊系の人物である。

しかしなぜか貞季系図には見えない。季盛を系図に書きこんだのは私である。また季盛は藤崎

のどこに住んだのであろうか。いずれにしても十三湊系の季盛親子が、藤崎の地に入るということは、何らかのもめ事の種にはならなかったのだろうか。それが季久・季長の争いの原因になったのであろうか。季久はやがて宗季へと変わるが、この宗季という人物は初名政季であり、季久が改名して宗季になったのではない（改名の習わし）。この政季という人物は、貞季系図では基季の子であり、基季は全く予想外の能登輪島に住んでいたのである。北前船に関連した業務を行っていたのかもしれない。そして子の政季は藤崎の成季の後を継いだようである。成季には嗣子がいなかったように思われる。さらに政季は季久の家も吸収したやに思われるのだ。宗季と改名したのはそのときではないのか。季久に代わり宗季になったということは、季久・季長の争乱で、季久にも何らかの咎めでもあったのだろうか。

そしてさらに従来の『米良文書』にある、断片的な宗季一師季一法季一盛季一泰季なる系譜史料からは、いくら考えても推測出来ないような史実が、私が復元した系図（図3）から読み取れるのである。それは一族の流れが変わっていくことだ。成季の後を継いだ宗季（始め政季カズ・ノリ）は、子の兼季を十三湊の能季の婿養子にだすが、兼季は師季（カズ）と改名する。そしてその子貞季は藤崎の慶季に婿養子に入り、名を忠季・法季と二度も改名している。なお康季が泰季とあるのは、改名か誤字かは分からない。

そして応安五年（一三七二）には安倍一族の歴史の中で、最も重要なことが起こったと思われる。それは一族が三カ所の領地に分かれて独立するという決断である。それが応安五年に忠季（十三湊）・高季（藤崎）・頼季（秋田）の三人が、同時に男鹿本山赤神神社に寄進や棟札を掲げたことが如実に物語っている。藤崎を上国として十三湊を下国、秋田は湊文書によれば、下国の門葉として下国を称することになる。男鹿本山縁起を見ても分かるように、赤神神社は古来より安倍氏にかかわらず、奥州の領主に崇敬された神社なのである。この神社に関わる人物は領主級の人物なのだ。奥州の歴史はこの神社に遺っていると見える。

湊家の創立

ときに応安五年は一族にとって特別な年であった。巻末の本山縁起および棟札の写しによれば、十三湊に領主の貞季（忠季・法季）・藤崎に高季・秋田に頼季という配置になり、同じ年に三人の人物が男鹿本山に寄進していることだ。古来より本山に対する寄進は、広域的な領主級の人物に限られるという伝統が感じられるが、同じ年に安倍忠季が領主として棟札を掲げ、本山縁起には安倍高季が本山を修造し、船越頼季が観音堂を建て仏像を三十三体収納している。一族の秋田入りは康永の始め、兼季が足利尊氏より秋田比内三郡を与えられたことから始まるようである。兼季は別名女川寂蔵とも称してたようだ。（図4参照）

そしてこの船越頼季は原系図には、なぜか城之介頼季となっていることなのだ。これを誤りであると見過ごす訳にはいかない。親時季は土崎に住んでいたようであるが、この船越に住む城之介のことは私には分からない。何故なら秋田城之介は一三三三年、安達時頭るとき鎌倉幕府崩壊によって消滅しており、その後には新政府により出羽守として派遣された、葉室光顕が兼務していたという。そしてその光顕も一三三六年には殺されてしまう。当時は鎌倉幕府の崩壊に次ぐ南北朝の争乱時代でもあり、国中が激動し混乱した時代であった。そのような時代の中で頼季の何

らかの活躍が、秋田城之介のように写ったのもあろうか。

ところでそのような国内の兵乱が相次ぎ、蝦夷沙汰権を伝統的に引き継いできた一族としては、北海の夷荻に対する備えも、怠ることの出来ない時代であったに違いない。これには大型の津軽船をもっていたことも手伝ったのであろうが、誰が真剣に国を守ったかの問題でもあったのである。湊文書ではそのような国内の兵乱の中、康季・鹿季の兄弟が、日本をたびたび北海の夷荻から守ったことが内裏に聞こえ、康季が参内して朝廷から日下將軍の称号を賜ったとある。この活動は一族の自発的な活動であったようだ。そしてこの参内は鹿季の生存中と考えられるから、これが最初であると思われるが、その後も永享七年（一四三五）羽賀寺焼失後の参内では、康季が焼け跡の中に十一面観音像を見つけ掘り出し、それを後花園天皇に奏上したことより、羽賀寺再建に至ったという物語も遺されている。

鹿季が秋田入りしたのは応永二年（一三九五）頃とされているが、それを復元系図（図4）で見ると、年代的に鹿季は、頼季の後を継いだのではないかと見えるのである。それも頼季に嗣子がなく突然死没したからではないだろうか。なお鹿季には「応永の始め兵二百騎を従え秋田城之介を討つ」という伝えもあるが、鹿季の時代に城之介がいたとするならば、そう考えるのが自然であろう。それで一族の中から孫の世代に当たる鹿季が急遽、家臣とともに頼季の家に入ったのではないかとと思われる。そこには戦いの必然性が感じられない。これが私の復元系図を眺めての推測である。そしてそのことが湊家を秋田城之介の家である、との伝承が生まれた要因ではないかとと思われる。真偽はともかく頼季に城之介なる名称が付けられた系図は他に見あたらない。情報として特記に値する。

湊家の系譜復元

ところで鹿季以降の湊家歴代とは、どのようなものであったのだろうか。不思議なことに『外三郡誌』には（図3）の後には載っていないのである。この系図は貞季が一四九五年頃に作成したもの、少なくとも自分が生きた時代までは書くのがふつうである。定季とは年代的に貞季の三世代後の人物であり別人である。そして学者を含め大方の人が秋田家系図にある、鹿季―成季―惟季―昭季―宗季―宣季―定季―友季―堯季...であると考え、そこに疑問を挟まない。しかし実際の湊家にはそのような系図は存在しない。いや実は天正十七年（一五八九）実季との湊合戦に敗れた子孫が、その真相を男鹿本山の縁起や棟札などを調べ、湊系図を復元しようと苦心したが、完成するまでには至らず、今に至っているのである。

要するに湊家の先祖は実季が系図を刊行した後から、湊の領主歴代の史実探求を開始している。このことを湊家子孫の世界で取るに足らない、どのようなとらえ方をしている人もいるようだが、本当に無駄な行為であったのだろうか。このことは湊家としては実季の作った湊系図を否定し、真実を探求していることに他ならない。私は現在先祖の思いを継いでいるようなものである。実季より五世代前に作成された貞季系図では（図3）のように、康季・鹿季は兄弟であり、成季（愛季）とは同世代人である。成季は鹿季の子にはなり得ない。また康季・鹿季には兄守季がおり、その親にも盛季がおり、モリスエが二代続くことが、実季の覚え書きにあることも前述した。しかし実季は史実である覚え書きを無視して、系図を作成したことになる。実季はま

た「家の系図は良きものが一目おかれる」との本音を吐露しているが、気に入らないものは書き換えたのである。であるからして史実と符号しないのは当然である。なお盛季の家督である守季は事跡がなく、何か影の薄い存在であるが、私にはこの守季は身体的に虚弱であり、家督を継げなかったのではないかと思っている。五所川原市の蓮花庵蔵とされる、伝盛季（守季）像なる少年の武者像に何かそれを感じるのだ。

そのように史実を違えた湊家系図は、従来から始祖である鹿季に庶季や廉季などと、人物の特定に混乱を与えた。それも能季の子である愛季を、読みを同じくする成季として、盛季の弟としたことも混乱に拍車をかけた。そして湊家系図を、①鹿季―②成季―③惟季―④昭季―⑤宗季―⑥宣季―⑦定季―⑧友季―⑨堯季...、であるとした。しかし男鹿本山縁起や棟札などには、②成季～⑥宣季までの人物は載っていない。それと歴代がまるっきり合っていない。秋田家系図は、①康季―②義季―③政季―④忠季―⑤尋季―⑥舜季―⑦愛季―⑧実季...、であり⑦定季と⑨堯季は同一人物としているが、相互の年代関係は舜季の妻は堯季の娘、すなわち⑦定季（⑨堯季）と⑤尋季とは同世代でなければ不自然なのだ。

これには鹿季以降秋田の領主であった真の湊家歴代を抹消し、別の歴代にすり替え、檜山時代の息の懸かった歴代にしたい、という思いが感じられる。ところで鹿季以降の本山棟札にはどうあるであろうか。巻末に載せた「古来棟札」には、

応永三十三年（一四二六）五月八日 再興三度 領主沙弥安倍浄宗

寛正元年年（一四六〇）六月十三日再興四度 領主大旦那安倍銀宗

文明十八年（一四八六）再興五度両社両脇 領主大旦那安倍貞季

大永五年（一五二五）九月二九日五社兩年 領主大旦那安倍朝臣沙弥洪郭

弘治三年（一五五七）六月十五日再興七度 領主大旦那安倍朝臣 季

とあるが縁起によれば、

永正十五年（一五一八）多宝塔修理 安倍堯季

が追加される。この堯季は法名沙弥洪郭の親であり、洪廓の実名は湊文書では廣季であると伝わっており、秋田家系図では友季とされている人物である。また浄宗・銀宗の実名は残念ながら湊文書には見当たらなかった。これが真の鹿季子孫の湊家歴代なのである。

ところで浄宗・銀宗とは仏に帰依する禅門の名であり、生前の法名である。死後に送られる格式を誇るような、ものものしい戒名（法名とも）とは違い、仏門のもとで平等でありシンプルである。湊家では「宗」の一字を後に、檜山の秋田家は前に付ける習わしがある。実名の「季」の一字の扱いと同じである。これも人物を特定するには一つの重要な手がかりとなろう。そして実名をこの年代の文献で探してみると、海保嶺夫氏編による『中世蝦夷史料』と『中世蝦夷史料補遺』では、戸沢家譜と北部御陣日記とに、それらしき人物名が見える。その人名・称号・年代・出展および同時代関係者は、

鹿季 秋田城之介 一三六六 戸沢家譜 戸沢伊盛（年代として兼季時代であろう）

秋田鹿秀 一三七〇 戸沢家譜 戸沢行盛（同右）

成季 秋田城之介 一四〇二 戸沢家譜 戸沢泰盛

秋田成季 一四〇四 戸沢家譜 戸沢泰盛

成季 秋田城之介 一四三九 戸沢家譜 戸沢寿盛

定季 秋田城之介 一四四四 戸沢家譜 戸沢寿盛

親季 秋田城之介 一四五六 北部御陣日記 (蠣崎蔵人信純)

ここで考えなければならないのは、秋田鹿秀とは鹿季のことと思われるが、秋田成季など実季以前に秋田姓を称したりしていることは、多分に秋田家系図の影響を受けていると見なければならない。

しかし今ここで知りたいことは、年代とその時代の領主の実名である。どうやら一四四四年の秋田城之介定季とは年代的に法名浄宗、一四五六年の秋田城之介親季とは法名銀宗のことではないかと推測される。ただし親季(チカスエ)とは前例にならえば愛季かもしれない。法名銀宗とは銀鉦山に関係していたのでもあろうか。銀の文字は何かそれを連想させる。かくして鹿季子孫の湊家歴代実名は、

①鹿季—②定季—③親季—④貞季—⑤堯季—⑥廣季=⑦〇季...と復元することが出来た。そして④貞季こそが明応四年(一四九五)補陀寺に、秋田城之介として系図を献上した人物である。以上湊家の復元系図とともにその考察を含めて、(図5)としてまとめてある。

鉄船と洪廓

【湊文書を良く読めば】

ここで法名鉄船と洪廓について考えておきたい。この鉄船とは湊家歴代の⑤堯季であり、官職は左衛門督である。洪廓とは堯季実子の⑥廣季のことであり、官職は左衛門左である。そしてこの鉄船と洪廓については、なぜか秋田家系図では、この二人の法名を、院号・同号・法名のように一緒くたにしたような、とても生前の仏門に帰依する禅門の名とは、考えられないような異例な法名、鉄船庵大虚洪廓庵主としている。これは鉄船と洪廓とを纏めて合成した、後世に考えられた法名であることは一目瞭然である。

そして⑥廣季は秋田系図では友季とされている。この名は法名洪廓の洪から共を選び友の字を当てたように思われる。またこの廣季(友季)はどういう訳か堯季の実子ではなく、檜山家からの養子であるという、誤った情報が氾濫している。しかし実季の作成した秋田家系図からはそのようなことは見出せない。その誤解は何に起因するのであろうか。それはおそらく廣季に嫡子がなかったことに起因しよう。廣季は若くして仏門に帰依し大永四年(一五二四)には、左衛門左入道として管領細川高国よりの書状を受けるなどの実績がある。翌大永五年には領主沙弥洪廓として本山に棟札を掲げるが、親堯季は廣季の将来を期待していたようで、領主を廣季に譲り、湊城を出て自らの住まいを鉄船庵とし、庵主として隠居していたと思われる。法名は鉄板張りの船を連想させるが、天文十三年(一五四四)年洪廓は親堯季より先に嗣子のないまま死没し、秋田家から舜季の次男春季を養子に入れる。これが堯季の養子の如くになり、あたかも堯季に嫡子がいなかったように見られる要因である。

その後は堯季が再び領主の座をつとめるが、七年後の天文二〇年(一五五一)死没する。そして春季は弘治三年(一五五七)、本山に領主安倍朝臣〇季として棟札を掲げるが、なぜか「季」の文字だけの空白の実名であった。湊城での受け入れに冷ややかなものを感じるが、元服ができ

なかったのかもしれない。そして春季は十六才にして早世してしまうが、没年は不明である。その後舜季三男重季（秋田家系図では茂季）が湊城に入るといふ、二度にわたって養子を入れたのであるが、このときは湊家の領主は不在の状態であった。おそらく檜山城（秋田家）の舜季嫡男愛季の意向が働いたと思われる。なお檜山の舜季の妻は廣季の姉か妹であり、春季・重季は廣季の甥に当たる。

このように堯季と廣季の嗣子問題の不明確さが、系譜の混乱を招いた原因ではあるが、秋田家系図でいう定季と堯季とが同一人物であるとしても、友季（洪廓）と堯季（鉄船）との法名が一緒くたになった理由は分からない。

このように湊家の嗣子問題と、湊側の檜山方に対する反発による混乱で、弱体化した隙を突かれたのであろう、永禄十三年（一五七〇）豊島休心に湊城をおそわれ、全面的な兄愛季の援助によって救われる。結果として重季は豊島の城へ身を引くこととなり、湊城は愛季の差配の下に組み敷かれることになるのである。やがて湊城には愛季の嫡子実季が入り、豊島城の重季は子高季（秋田家系図では通季）・政季兄弟をもうける。かくして檜山の愛季は湊家を手中に収めることになった。重季は天正七年（一五七九）兄愛季より先に死没、官職は左衛門尉であった。愛季は天正八年（一五八〇）従五位下受任、天正十五年（一五八七）、四九才で死没する。檜山方はそれまで無位無官であった。そしてその二年後の一五八九年に湊合戦が勃発したのである。

なお湊家が所存している織田信長からの書状であるが、年代比定を天正三年（一五七五）とすると、愛季が受領したとするよりも重季が受領したとする方が、理にかなっているのではないだろうか。この時には湊の領主はまだ重季である。この辺りの年代と人物の移り変わりは、イメージ図（図5）「安倍姓湊系図考察図」を参照いただきたい。

湊合戦の後

湊合戦は檜山方の勝利に終わり、高季・政季兄弟はしばらく流離、その後高季は南部信濃守利直に仕官。政季は始め秋田実季に仕官、その後故あって流離の後、津軽土佐守信義仕官、また寛永十二年には南部山城守重直に仕官するという変遷を経ている。そして政季子孫は佐竹藩に仕官を続けた。そして万治二年実季が秋田家系図を発刊した頃から、政季子孫湊孫十郎金左衛門盛季（一六〇一～一六六二）、金左衛門許季（一六四六～一七〇八）親子が、鹿季子孫の真相の探求に取り組み始めるのである。もとより高季・政季兄弟の親は檜山の愛季の弟であるから、秋田家の別れとしての系図はある。しかし高季・政季はあくまで湊家の後継を主張して檜山方と戦い、その思いは子孫にも同じであったに違いない。

ましてやその真の鹿季系譜は抹殺されている。当然のことながら史実を復元して世に問わねばとの、先祖を顕彰したいという、義務感にも似たような思いも感じられる。だがしかし、身内同士の戦いであったとなると、合戦当事者はその真相を黙して語ろうとしない。その裏には湊合戦による親族同士の、遺恨の再燃を避けているようにも感じられるのである。したがって旧古老へ書簡によって湊家先祖を尋ねても、返書は的を外した檜山系のことばかりで、肝心の湊家先祖のことを語らないことが文書群から読み取れる。

ところでここで別系湊家脇本城主の家系について、問題を提起してみたい。湊家には湊を称す

る家が五家あったという。それを湊五同名と言っていたようであるが、男鹿脇本城主もそのうちの一つである。そして氏季の子孫が種季に繋がるのか、ということについてである。氏季は慶長七年（一六〇二）九十三才で死没、種季は寛永十二年（一六三五）七十一才で死没とすると、生年の歳の差は五十五才となる。これが親子の年代差とするとその差は開き過ぎるのと、湊文書にある安倍姓湊系図では氏季・種季二人の間には、某として実名を伏せた人物が存在している。愛季からの書簡によれば、湊撰津守は種季の親になることは明らかであるが、撰津守が氏季とは決められず、実は某とされているとも考えられ、種季の親は氏季ではないのかとの疑問が生じる。それと湊文書には親重季の亡き後、当時まだ幼少であった高季・政季兄弟には後見人が付いたとある。名は記されていないが、湊合戦で討ち死にした、脇本城主五郎脩季との関係が問われるのである。

この男鹿脇本城と土崎湊城との構成は、あたかも十三湊遺跡に見る貿易港湾施設と、福島城という軍事施設の二つの組み合わせに、類似性があるように考えられる。成季子孫も湊を称していたとすると、成季一惟季一昭季一宗季一宣季は、脇本城主であったのではないだろうか。

ただし宣季子孫が氏季に繋がるのかどうかは分からない。

なお奥州安倍一族を安東氏ということに付いてであるが、湊文書を見る限りそのようには括れないようである。安藤氏は古来から見受けられるが、安東氏はどうも別としなければならないと思われる。確かに安東姓は湊文書にも見受けられるが、それは檜山の愛季が一族の頭のように力を付けた頃から見られるようになる。例えば元亀元年（一五七〇）種季の烏帽子親となり命名したのは、安東孫太郎・安倍種季であった。また政季の烏帽子親も愛季であったが、天正十四年（一五八六）命名は安東孫十郎・安倍政季であった。しかし政季は名字を安東とは称せず、秋田家を離れても秋田を名乗ったようである。

そして安東氏を決定付けたのは、実季が作成した万治元年の秋田家系図であろう。この系図では自らの名字はもとより、先祖を含めて安倍一族は、すべて安東にエスカレートしてしまう。これは創作であり史実ではない。湊家までも湊安東なる奇妙な苗字となっている。湊家はあくまで安倍姓湊なのだ。私はこの安東を単純に認める訳にはいかない。種季子孫はその後苗字を湊氏に戻している。

このように秋田家系図を離れて、安倍一族の系図を正しく復元してみると、今まで見えなかったものははっきりと見えてくるのである。また私が個人用に考案した、年代軸に貼り付けグラフ化した系図からは、今まで謎めいた奥州安倍一族の実態が、こじつけなく正しく捉えられ、奥州の歴史が書き換えられるかもしれない。

まとめに

【本稿に補足するものとして】

話が前後するようで書としての体裁が整わず申し訳ないが、あまりにも古代の実像の復元方法がお粗末に感じたので、私見として一步踏み込んで補足しておきたい。歴史そのものは過去のまま厳然として存在し、変化はしない、正しいか誤りかは、いつでもその実像に迫ることができる。なりふり構わずここで私見を補足しておきたい。

私は歴史研究者ではない。では何でこのようなことをしたかであるが。それは私が先祖について真実を知りたかっただけである。その始まりは平成元年頃からのことであった。ところがこれが伝承だけで色々な説があり真実が奥深く隠れており、容易に引き出すことが出来ない。何しろ蝦夷説なるものもあるくらいである。少なくとも湊家に伝わる文書にある伝承だけでも、その根拠を知りたかったのである。遠くは安日長髓彦の世界であり、記紀の世界でもある。まともな史料のない世界でもある。何からどのように考えていけば良いのだろうか。そして私は先ず、記紀の年代が実の年代より遠くに引き延ばされて、寿命も百才を超える異常な年齢となる、いわゆる記紀年代に取り組んでみたのである。これはまだ多くの研究者も結論を出したとは思えない、未解決の分野である。記紀年代の実態をグラフにしたものさえない、科学的研究には手つかずの分野なのである。要するに科学的研究から見れば、その初歩にも至っていなかったということである。

そこで私は記紀年代にある歴代大王をグラフにしてみた。そしてそれが不自然で人為的に操作されていることを知った。問題はここにあった、これが記紀年代の本質的な状況だ。これを実際の正しい実年代に正すことで、新たな史実が見えてくるかもしれない、そこに私が手を付ける糸口が見つかったのである。この問題解決は既存の研究にはないものである。しかもあれやこれやと多くの史料に取り組む必要のない、統計的手法の前にやるべき異様な年代グラフ、それを復元する数式を考え出せば、後は単純な計算作業だったのである。

そしてその作業していると系譜における正当性や、矛盾などが見えてきて系譜も正さなければという、史実も見えてきたのである。また人物とその年代からして一例を挙げれば、埼玉古墳群の稲荷山古墳出土の鉄剣銘にある、四七一年のワカタケル大王を雄略大王とするのは誤りで、実年代では応神大王（品陀真若王）になること。これは日本書紀では二十一代大王雄略が遠くの、十五代応神まで年代を繰り上げられているからなのである。実年代では応神であるが、虚の年代では雄略が、たまたま四七一年で合致したに過ぎない。私はその古代の実像を『改竄された記紀と古代日本』として平成十一年に出版した。

このように記紀年代を実年代に変換してみると、倭国大乱とは彦火瓊々杵尊から、神日本磐余彦尊（神武）までの九州に移住していた氏族が、出雲や大和の先住氏族を討ち払って東遷してきた、戦乱の史実であることが分かるのである。決して神代のことではない。したがって神武も安日長随彦も実在した人物となる。安倍一族は大和の発祥であり、蝦夷の出自ではない日下（ヒノモト）の出自なのである。

そして長随彦子孫は古来より中央において、積極的に国家の建設に努めていた誇り高い氏族なのだ。なおこの先住していた氏族は国史を編纂するにあたり、後から移住してきた氏族にはない史料を提供したという。そして最初に古事記が編纂されるのだが、おもしろいことに大和の王歴代のうち、先住氏族と思われる人物の享年は実年齢で書かれていることなのだ。古事記は日本書紀に比べ史実の操作が荒く、史実をありのままにしている場合もあるようだ。次の表を見てみると、②綏靖③安寧④懿徳⑧孝元⑨開化の享年は、神武が一三七才まで生きたとするには若すぎることになる。何故なら仮に神武の享年を五〇才とした場合は、全ての享年は比例して低くなり、②綏靖の四五才は一六、四才の少年となり不合理になる。要するに年代引き延ばしの中で

の四五才・四九才・五七才・六三才は年代操作されていない実年齢と考えられるのだ。（私が復元した神武の享年は古事記・日本書紀双方からともに四一才と合致する）この事実を推測すると古事記編纂に当たり、先住氏族が提出した先祖史料は、史実操作を遠慮したと思われる。しかし最初の国書である古事記では、先祖の史料に配慮された先住氏族も、八年後の七二〇年では、日本書紀は血脈であるかの如くに装う為に、かなり無理して生没年および享年などの操作がおこなわれている。

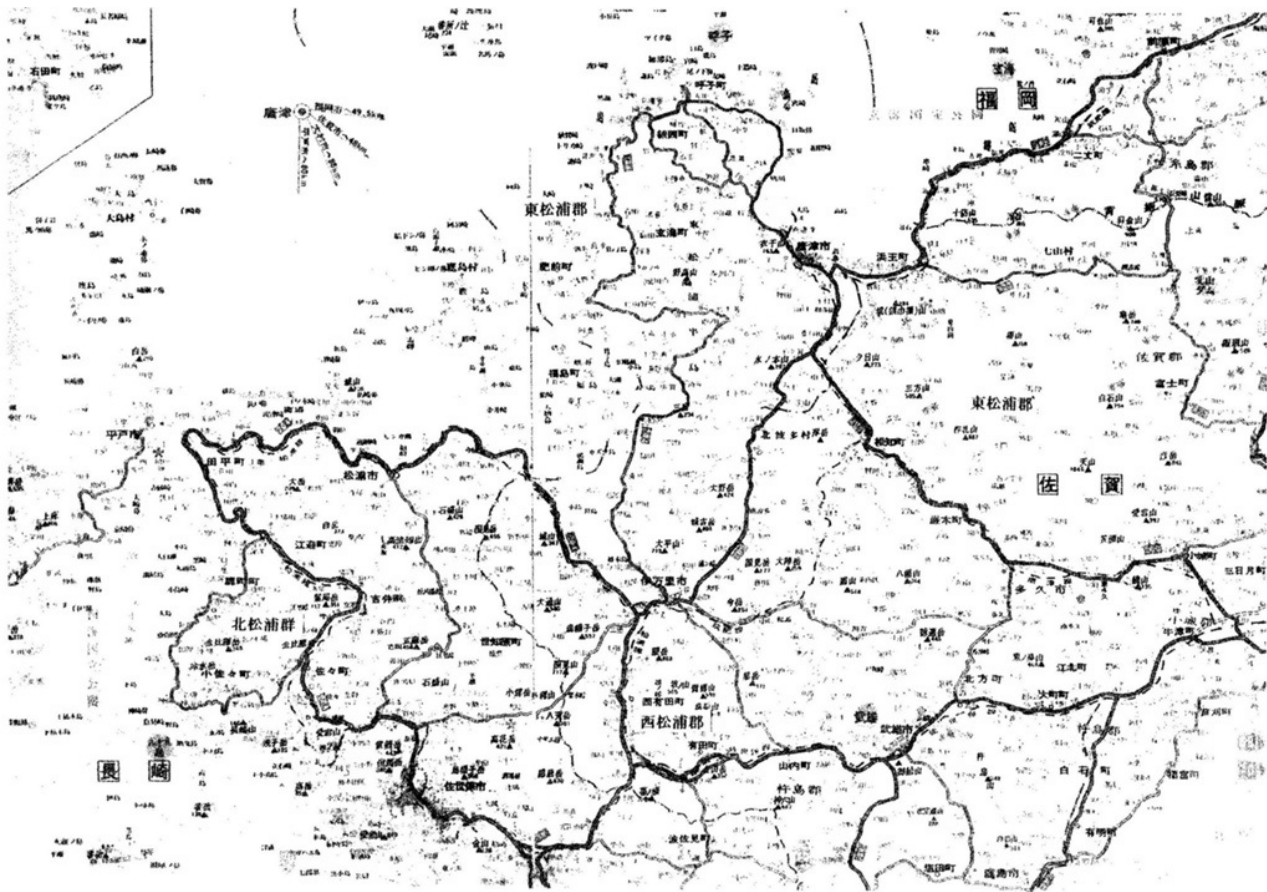
⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	古事記歴代
開化	孝元	孝靈	孝安	孝昭	懿徳	安寧	綏靖	神武	
六三	五七	一〇六	一一三	九三	四五	四九	四五	一三七	古事記享年

ところで「はじめ」にも述べたがこの倭国大乱後、邪馬台国に卑弥呼が女王として擁立した。これは国王である。神武が祭りごとから、政治（まつりごと）によって国を治めようと大和に入ったが、民衆の神を信仰する心はすぐには変えられず、倭国大乱に勝利した神武側に恭順を示すために、祭祀に使用していた銅鐸を鏡に変え、銅剣などの武器とともに、土中に埋設されたり破壊されたりしたのであろう。銅鐸は音が出る。そこで今までの信仰を続けるために、新たに鏡を祭祀に使用したのではないだろうか。そして神武は一応大和政権の手掛かりを付け「初国知らず」にはなったが、まだ完全ではなかった。倭国の代表はあくまでも邪馬台国の卑弥呼だった。結局新政権に賛同する豪族がそれを引き継いだのだ。そして⑩崇神の時代に邪馬台国を平定し、本格的に大和政権がはじまるのである。それが二度目の「初国知らず」の真相であろう。実の年代では邪馬台国と、①神武～⑨開化までの初期大和政権とは併立である。

なお女王卑弥呼のいる邪馬台国の所在地の問題であるが、これは方位の問題を抜きにしては語れない。漢字が伝来するまでは、東西南北をどのように称していたかは分からぬが、言葉での方位は当然あったに違いない。問題はそれに対しての漢字の当て方なのだ。何しろ倭人は太陽に対する思い入れが強い。ご来光を崇めるなどは誰が教えたでもなく、今に続く日本人の心なのだ。

この時代は太陽を高く見る方向、日高見の方向、南が肝心だったのである。そこで漢字の意味を東西南北の配置を動かさず、東と南で取り違えて方位に当てたらどうなるかなのだ。それを示唆するような例が沖縄地方にある。沖縄の方位では古代の名残としてか北を強引にニシと読んだり、おもしろいのは九州の松浦地方の東・西・南・北に分割された郡の方位なのである。この松浦郡は魏志倭人伝ある、古代の末廬国であるといわれているが、肥前国となった後も松浦郡として、広域的な存在であったようだ。そしてこの地は前九年の役で安倍貞任が敗れた後、弟宗任の子孫が松村党を興した縁の深い地域でもある。

ところで問題は一八七八年（明治十一年）に、東西南北に分割されたとある方位の付け方なのだ。下の松浦地方の地図では、まるで東松浦郡・北松浦郡・西松浦郡の位置が九〇度反時計方向に回転している。そして南松浦郡を五島列島においてるのである。



この方位は漢字の本来の意味からすれば明らかにおかしい。何か歴史的謂われでもあったのであろうか、そうとしか思えない。古代の倭人もそのような認識にあったのではないだろうか。そのように考えたときに魏志倭人伝にある倭国の陸上の方位は、九〇度時計方向に戻して読まなければならない。ただし九州までの海上は別なのだ。そこは世界の方位として定着しているであろうから。

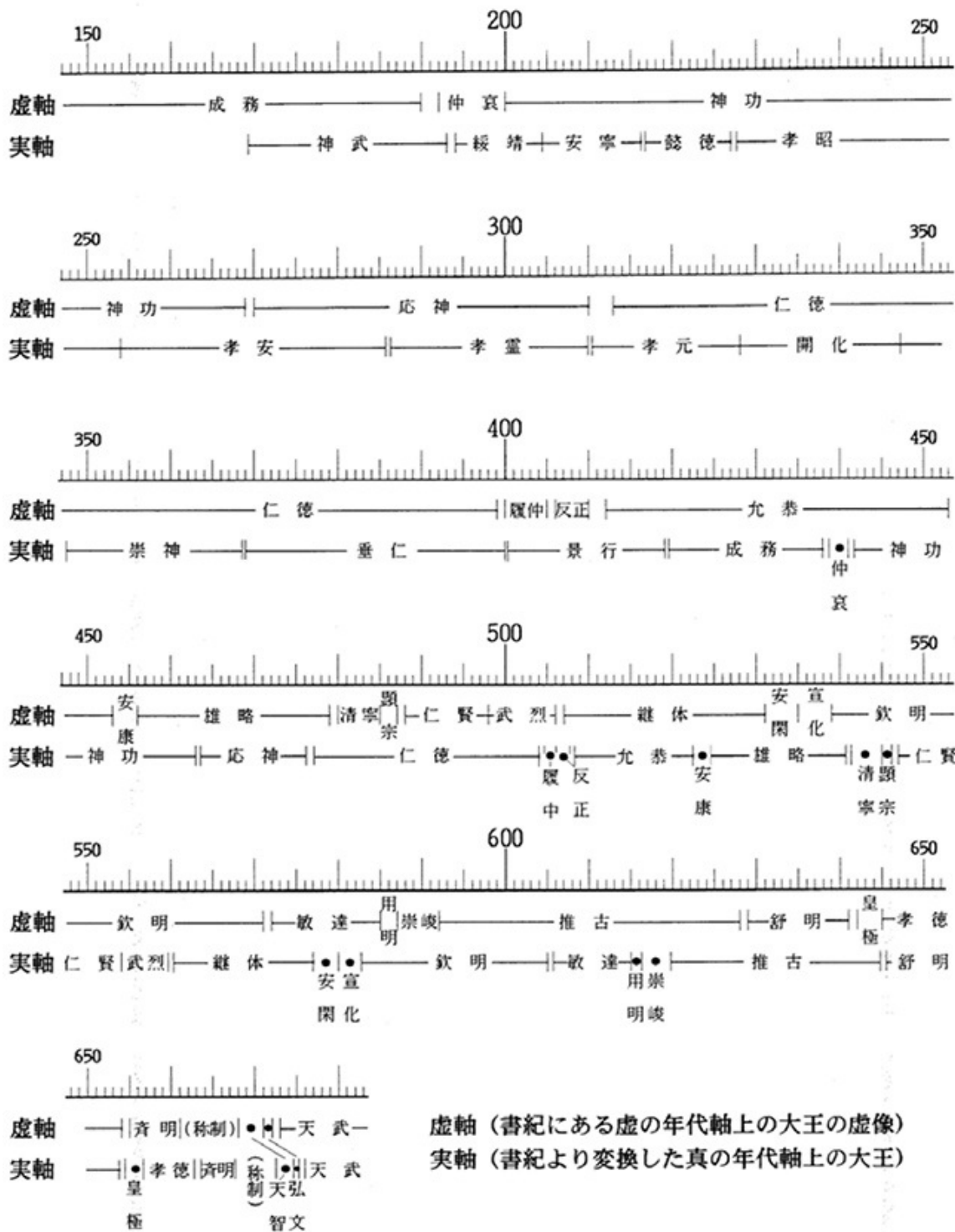
実は今まで無視され何の解説もない記事として、倭国における方位の混乱を改め、統一したと思われる一文が書紀にあるのである。

それは成務五年に行政地の区割を定めた際に、「東西を日の縦とし、南北を日の横とする」とあるからだ。そのような一見当たり前のようなことがえて書いてある。このことは今まではそうではなかったということになる。そうであれば邪馬台国は近畿以外には考えられない。だが別に新たに興った国であるとは限らない。卑弥呼がそこにたったということである。国の広さは分からないが当時一番の大国と思われる。

ところで邪馬台国と狗奴国との関係であるが、記紀年代を正してみればこの時代とは倭国大乱の後で、卑弥呼が信仰を絆にした、従来型の祭祀による統一を続けるのに対し、狗奴国は大きな統一された国家を目指す新政権、神武が東遷して新しく出来た、大和政権の始まりという構図になる。大和政権はまだ国家の代表ではなく、国家としての代表は邪馬台国の女王卑弥呼である。そしてその国は互いに諍いを起こしていたということだ。位置的には山代と倭との関係を推測している。神武に敗れた長髓彦の遺跡は年代と継続した期間が六百年間を考えると、唐子・鍵遺跡ではないかと推測している。ただし邪馬台国は戸数七万戸であるから、それなりに広域なはず

であり、狗奴国とは神武が東進して出来た、長隋彦が追放された後の新しい国ではないだろうか。いずれにしても大和政権の初期の国であり、方位は邪馬台国の南となるのである。このように先ずは自国の歴史である記紀を正し、また潜在している史実を発掘することによってしか、魏志倭人伝の方位問題は解決出来ない。

さて魏志倭人伝の陸上での方位で邪馬台国の南が、そのまま正しく狗奴国になる事についてであるが、これは作者または使者が実際に、邪馬台国に案内されて来ていたのではないかと思われる。九州の末廬国から不弥国までの旅程は、倭国側の案内で途中の国々の説明があったであろうが、その他の女王国に属する国々の説明は、邪馬台国に着いてからではないかと思う。九州を離れ投馬国（関東の多摩か）・邪馬台国への海上航行の場合を含め、おそらく簡単な倭国式の地図での説明であろう。各国の位置などは説明を受けたままを記録しなければならなかったであろう。方位も倭国の認識通りのはずである。特に敵対関係にある狗奴国の説明には、その方向を指さして示したのではないだろうか。そのため正しい方位が伝わったと考える。そのような情景の推測はさておき、年代が実年代で捉えられていれば、倭国大乱の実像が捉えられ、それに続く邪馬台国の位置は決まるのではなからうか。しかし魏志倭人伝では邪馬台国の戸数七万戸とあり、人口にして考えた場合と人口密度とでかなり広域な国となろう。



書紀データによる大王の虚像と実像

以上のように記紀年代を実年代に変換して史実を探求したものに、拙著『改竄された記紀と古代日本』がある。ご一読されたい。この度は私が先祖に関わる歴史として、古代から常々疑問に感じていた事柄を、十数年に亘り独自の発掘と手法で解決を試みたものを、世に問わずにいられなく、学会その他関係組織には何の手続きもせず、全て私見として公開するものである。スタートから道を間違え、新たな研究に扉を閉ざしてきた日本の記紀研究は、未だに科学的な記紀年代を解明していない。そして脆弱な基盤の上に、文学的に語られるものは史実ではなく虚像でしかない。従って中国および朝鮮などの、実年代の文献に見える実像の記事は、遊離したままで何の役にも立っていない。

そしてそのような歴史研究のあり方でよいのかどうか、皆さんがどう考えるかの問題を提起す

るものでもある。私の先祖研究は先祖だけの研究に終わらず、日本人の歴史研究に広がってしまったが、私が記紀年代を科学的な手法で、実年代に復元したことを検証するには、浅学な私だけでは出来るものではない。厳格な検証とご批判を賜りたい。

最後に古代の大王歴代が虚像と実像とで、どのような関係になるのかを参考までに、『改竄された記紀と古代日本』にある表を、前ページに載せておく、また書記年代を実年代に変換した、古代の実像を巻末に挿入してある。記紀年代は六八三年以降は実年代に一致する。変換年代の厳格なる検証とご批判を賜りたい。

小鹿本山縁起之内抜書き

貞觀二年庚辰慈覺大師到此山建堂塔寺院號赤神山日禪寺永禪坊圖武帝
飛來之像以為當山神林也因先說畫此像則飛來之說從初基歎且以智人二人
觸壁作一寸二分藥師之像入瑠璃箱納石室寶藏而安置神殿幃幃赤卷慈覺至當
只崎持經吊神神因號其寫曰御擊寫也自尔以來有本地垂迹稱曰赤神舊現
藥師亦不明神不動眼光鬼變骨人老支殊押領鬼阿彌陀也同辛未年慈覺
也終而慈覺歸翠山是故以慈覺為中興也應德元年申子安信負任奇河楳
田三町嘉保元年申戌清原武衡寄附北谷水田三町永長元年丙子安信安任寄
附副田田三町美徳二年丙寅清原清衡寄附井森内隨野磨崎相井夷田合十一
町康和四年壬午清衡亦寄附大部田田三町同五年癸未亦寄附小支田四町嘉承
元年丙戌藤原基衡寄附北浦行澤田一町天仁二年戊子基衡亦寄附金河楳田
田一町八段深田一町同寺賴繼寄附小鱈河田二町二段大鱈河田七段合三町楳
八段天保元年庚寅秀衡寄附野田五段同三年壬辰秀衡亦寄附楳田一町長
寛三年申申深秀為供一切經寄附東限歌河西限荒野楳宮前冷水南限湯長之北
限深秀大進建久四年癸丑紀次郎銜遠寄附今澤田一町同年公業寄附宮前附
小崎田六段康暦元年己未寄附大鱈川田七段五合康保二年申戌慈覺藥師堂同
四年丙子別當國轉感靈堂錄名石府實朝公即命國轉而堂社寺院畫取念于
今所存五社則所謂山王七社也華表在基堂山宮村華表内謂御坂七里寺院四十六坊
其餘堂社不勝計當山以此時為盛也別有一社名曰山王寺無事寺無事寺其別當或任僧正
顯宗同五年丁丑安信盛查再興二王堂負應元年辛巳公業亦寄附楳河田一町元徳三年
辛未安信高香處多寶塔貞和元年乙酉女川寂藏校啓大堂觀應三年壬辰平高
寄附中野田一段延元元年丙申安信政香寄附雄勝郡東馬音内楳村應平五年壬子
安信高香後五社同寺船狀類香赤觀音堂納三麻佛使明德三年辛未別當賴叶法
印寄進鐘一口寄進也賴叶初出天台宗而欲入真言宗當山低是為真言宗永享三
年辛未安信敬香寄附小鹿島内井森行瀧河村永正十五年戊寅安信克香泖法
多堂天文十六年丁未石塚次高九瀬則安信香滿捲儀大堂弘治元年丁卯永禪坊
院亡同三年丁巳別當基香捲儀大堂元免元年庚午當山院頭遍照院任持園香法
印綱捲儀拜殿同三年壬申別當國隆大僧正去錄三年甲午安信堂香佛堂
佛堂
寄附小鹿島之内七百五十石蘇同四年源義光佛堂出奇進戶帳傳言此時義光已
領取上而有年若仙友結田之志出禱此神也廣長七年壬寅堂香移封常別當此
時神領畫地堂社寺院已漸破壞總右者堂社三十區寺院九宇同年
淨光院殿佛堂住持出衛權中將兼為羽川六郎大守慶長十三年戊申執政澁江政之通與
大堂同十八年癸丑寄附小鹿島橋村之内一百石元祿三年丁巳信經五社拜殿堂承十
五年戊寅佛堂鑑照院殿佛堂住持下火也漸佛堂少僧無後受再興

当山古来棟札

同百三十八代花院御宇
 自和二年太歲六月廿日
 大檀那寂藏
 願主汝門道勝

同百三十八代後園融御宇
 應安五年太歲六月廿日
 檀那孫太良平正盛
 同勝内太良勝原宗重

同百三十八代禰光御宇
 應永世三年太歲五月八日再興
 領主沙彌安信淨宗

同百三十八代後花園御宇
 寛正元年太歲六月十三日再興
 領主大檀那安信銀宗

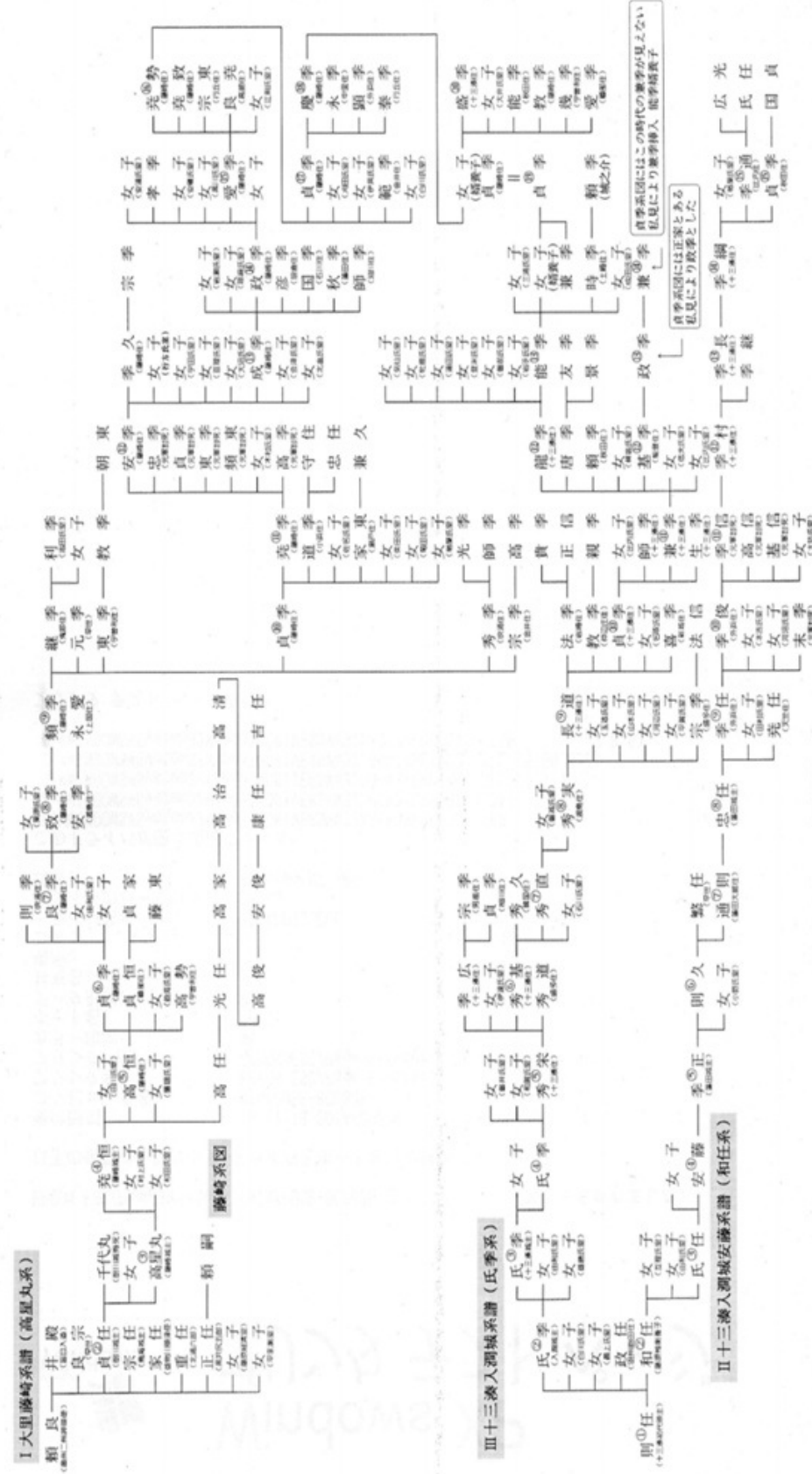
同百三十八代後新門御宇
 文明八年太歲再興
 領主大檀那安信貞季
丙午 兩社併脚同身

同百三十八代後橋原御宇
 大永五年太歲九月廿九日再興
 領主大檀那安信朝臣源洪繁
同百三十八代兩身
 大願主淡利朝臣源貞義

同百三十八代後奈良御宇
 弘治三年太歲六月十五日再興
 領主大檀那安信朝臣季
七度

石心石年不中道 承之山御宇
 書之
 承之山御宇
 承之山御宇

信長殿



明徳四年貞季作成による安倍一族の系図の抜き書き (貞季系図)

平成6年2月24日版 (學季)
平成7年10月21日藤崎系図追加

奥州安倍氏の実態

<http://p.booklog.jp/book/92377>

著者：湊 學季（タカスエ） 本名 學（マナブ）

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/abinagasunejp/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/92377>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/92377>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ